輝く生き方を求めて

私は、同和地区に生まれました。そのことを初めて知ったのは、中学二年のときです。母は、私にこう言いました。

「驚いた？母さんもじいちゃんから聞いたとき、驚いたんよ。でもね、人間どこで生まれたとか、どんな肩書きがあるとか、男とか女とか関係ないんじゃない。大切なことは、あなたがどんな生き方をしているかということ。自分の生き方に誇りをもつこと。それがあなたにとって一番大切なことだと思うわ。」

母の言葉ははきはきと力強いものでした。しかし、私はその言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になりました。それまでに同和問題については学校で勉強していましたから、差別は不合理でおかしいこと、絶対解消しなくてはいけないものと思っていたはずなのに。その日は自分の部屋で何もせず、何時間も座り続けてしまいました。同和地区出身ということを初めて知る私にとって、母の語ってくれた言葉は非常に心強いものでした。でも、なぜか心の中がもやもやしてすっきりしないのです。そんな私を気遣い、足音を忍ばせ、幾度となく私の部屋の前を行ったり来たりする母の姿を、今でもはっきりと覚えています。

次の日から母が変わりました。今まで以上に同和問題の学習会にも、部落解放に向けての運動にも積極的に参加するようになったのです。そして、そこで学習したことを、私たち家族に、必ず話してくれました。学んだことを生き生きと話してくれる母の姿を見るうち、私の心も前向きになり、学校で学習したことを必ず話すようになりました。こうして、私たちは様々な学習を進めていき、「この地に生まれ育ったことは、何ら恥じることも臆することもない」と胸を張れるようになっていきました。

高校に入学した私は、人権委員会に入りました。そこで、かけがえのない恩師である中村先生と出会いました。委員会活動はいつもうまくいくわけではありません。「いじめや差別をなくそう」という気持ちばかりが空回りし、私たちの活動が他の生徒に受け入れられないこともありました。「人の心は簡単には変わらない。けれど、私たちの気持ちはいつか必ず通じる。私たちは正しいことをしているのだから」中村先生は、こう言って、私たちを励ましてくれました。その言葉は、いつも私の心の支えとなりました。

自分自身を磨きながら、差別解消に向け積極的に活動している優子に出会ったのも、この頃のことです。彼女も、私と同じく同和地区の出身でした。活動がうまくいかないときも常に前向きな彼女の姿に、私は次第に惹かれるようになりました。ある日、私は彼女に、「どうして、そんなに前向きな気持ちでいられるの？」と問いかけました。彼女は、少し考えてこう答えました。「仲間がいるから」そして、「あなたもその一人よ」と答えてくれました。この言葉を聞き、私の心は今までにない、温かい気持ちになりました。

大学を卒業して、私は地元の会社に就職しました。二年後、同じ会社の音楽サークルで知り合った男性とお付き合いするようになりました。私は彼に、自分の生きざますべてを話しました。彼は、私の話をしっかりと聞き、私をまるごと受け入れてくれました。そして、私たちは結婚を誓い合いました。

私が生まれて初めて厳しい差別の現実と向かい合うことになるのは、このときのことです。彼のお母さんが、「絶対に反対よ。同和地区の娘さんとの結婚などとんでもない」 と猛反対するのです。彼は何度も説得を重ねてくれましたが、お母さんは、私に会ってもくれません。「会って私を見てもらって、私の話を聞いてもらえるのなら、きっとお母さんは分かってくださるのに」と思うと、つらくてたまりませんでした。彼は、「大丈夫。僕が必ず説得するから」と言ってくれましたが、私は、厳しい差別の現実から、逃げたいと思うようにまでなっていました。そんな私を励まし、心の支えとなってくれたのは、優子でした。彼女は、今の私の状況をしっかりと受け止め、まるで自分のことのように考えてくれました。人の心の温かさというものを、この時ほどありがたく思ったことはありませんでした。彼も、その輪の中に加わり、お母さんの気持ちを変えようと努力してくれました。「一度、彼女に会ってみましょう。」お母さんがこう言ってくださったのは、一年後のことです。それからというもの、私は部落の歴史や、いわれのない差別であるということを、なるべく分かりやすく理解してもらおうと努力しました。「お母さんをこんな考えにさせているのは、間違った知識や偏見であって、お母さん自身が悪いのではない。必ず分かってくださる」私が、優子からいつも励まされたこの言葉を信じて。

この春、念願がかない、私たちはたくさんの人たちに祝福され、盛大な結婚式を挙げることができたのです。式が終わり、「いつも優しく笑顔で話をしてくれたあなたに、つらい思いをさせてごめんなさい。これから息子のことをお願いしますね」と言ってくださったお母さんの言葉は一生忘れません。

私たちは、新居を私の生まれた地区に構えることにしました。ここに住み、ここで私たちの子どもを育てたいからです。現在、とても幸せな日々を送っています。「奥さんは、いつもにこにこして輝いているね」と人に言われることもあります。私は、「ありがとう」とさりげなく答えます。いつか、私たちの子どもも、「輝いてるね」と人に言ってもらえるような人間へと成長してくれるよう、私も自分に磨きをかけながら生活したいと思います。幸せをかみしめながら・・・。

【指導者用資料】

輝く生き方を求めて

教材の見方

一人ひとりが、部落差別に対する正しい理解を深め、自ら行動することが、部落差別解消に向けての大きな力になることを理解できる教材である。

社会的立場を自覚した作者が、母親の生き様から、自らの故郷に誇りをもつようになり、差別解消に向け積極的に行動していく。その過程の中で学んだことや、差別解消を目的とする人間のネットワークが、自らの身に差別が襲いかかった際に、それを解消するための大きな力になる。さらに、その力は、差別や偏見に縛られた心も解放することができる。

現在学んでいる人権・同和教育が、一部の人のためだけではなく、全ての人々の幸せのために行われていることを理解させたい。

指導のねらい

部落差別に対する正しい理解を深め、自ら行動することが、部落差別解消に向けての大きな力になることを理解し、一人ひとりの人権を尊重することが、全ての人の幸せにつながっていくことを理解する。

留意事項

○　同和問題学習で正しい知識を得ていた作者が、自らの社会的立場を自覚した際、頭の中が真っ白になった理由を考えさせたい。

○　母親が作者に、同和地区の出身だと告げたときの気持ちを考えさせ、その後の母親の行動が変わった理由を考えさせたい。

○　結婚差別を受けた際、それに負けることなく、差別と闘うことができた理由を考えさせたい。

○　彼のお母さんの心境が変化するまでの、作者やその周りの人々の行動について考えさせたい。

○　結婚式後の彼のお母さんの言葉から、差別をしていたこの母親も部落差別の被害者であることに気付かせ、部落差別の解消は、すべての人の心にある差別や偏見からの解放であることを、理解させたい。